



一人一人が安心して自分のよさを発揮できる学校

今成小だより



令和8年2月2日発行

世界に目を向ける人に Part 3

過去2年で2回、お話集会で聞いてもらった「エルトゥール号」。その続きを明日伝える予定です。子どもたちが世界に目を向けるきっかけになればと思っています。

明治23年、日本と仲よくなるためにトルコの大きな船、「エルトゥール号」がやって来ました。しかし、帰り道に台風に遭い、587名もの人が亡くなってしまいました。和歌山県串本町の人々が懸命に看病した結果、69人の命が助かりました。助けられた船員たちは、日本人に深く感謝をしました。そして、母国に帰ると日本人がしてくれたことを人々に伝え、その話はトルコの国中に広まっていきました。この出来事は今でもトルコの小学校の教科書に載っていて、“同じアジアの西と東、日本は昔からの信頼できる友人”と多くの人々が思うようになったそうです。【Part1】



昭和60年、イランとイラクという2つの国の間で戦争が起こりました。戦争は激しくなり、たくさんの方が亡くなりました。日本人が多く住んでいた地区にも爆撃が始まり、一刻も早くイランを出なければなりません。ところが、イラクのフセイン大統領は「48時間後、イラン上空を飛ぶ航空機を無差別に攻撃する」と告げました。250余名の日本人は、乗る飛行機がなく、「もう間に合わない」と絶望した気持ちになりました。

この話を聞いたトルコのオザール大統領は、トルコ航空に日本人の救助を求めました。すると、すぐに志願者が集まりました。そして、ぎりぎりのところで、日本人はトルコの飛行機で脱出し、無事にイスタンブールに着きました。「本当に来てくれてよかった。」と、心から喜び合いました。その後、飛行機を出した理由についてトルコ政府から発表がありました。「我々は、エルトゥール号の恩返しをただけです。」【Part2】

この話には、さらに続きがありました。イスタンブールはアジアとヨーロッパにまたがる大きな街ですが、交通の問題がありました。海峡を渡るのはボスポラス大橋のみで、車はいつも大渋滞。人々は困っていました。そして、新たに橋を建設することになった際、日本の企業が技術を提供し、協力しました。1988年に第2ボスポラス大橋が完成し、イスタンブールの人々は喜び、橋は「日本とトルコの友好のシンボル」とされました。

しかし、その後も交通量は増え、渋滞はさらに悪化しました。そこで、海底に地下鉄を通すという案が…。ずっと昔から語られてきた夢のような話でした。そして、現実に海底トンネルの建設が、トルコと日本政府、日本の企業の協力で、共同で進められることになりました。非常に難しい工事の後、ついに2013年、アジアとヨーロッパを結ぶボスポラス海峡横断地下鉄が開通しました。「トルコ国民150年の夢」が実現し、人々の生活の幅は大きく広がりました。両国の友好関係は続き、今後の協力にも期待が寄せられています。



世界の中で日本は、治安がよく安全に暮らせる国として知られています。また、伝統や文化を大切にし、四季折々の自然と調和して過ごす生き方は、多くの日本人にとって価値観の基盤ともなっています。

一方、世界には、言語や風習、考え方、価値観が異なる人々が暮らしています。国や文化の違いを理解し、互いに尊重し合おうとする気持ちは、これからの社会を生きる子どもたちの意識の根底に欠かせないものとなるでしょう。

本校では、自分のよさや友達のよさ、ふるさと川越のよさを大切にしてほしいと願うとともに、子どもたちが将来に向け世界にも視野を広げることができるように働きかけました。また、AETと共に英語（活動）も子どもたちが大好きな授業となっています。今後も平和で豊かな未来を築くため、子どもたち一人一人が自ら学び考え、行動できるよう導いてまいりたいと考えております。

ほめて認めて、叱って諭し、また、ほめて伸ばす